

ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(27) ルドルフ・フィルヒョウ

Scientists and Engineers in German Stamps (27). Rudolf Virchow

筑波大学名誉教授 原田 馨
KAORU HARADA

Professor Emeritus, University of Tsukuba.



シャリテーの医学歴史博物館に展示されているフィルヒョウの肖像画

シャリテー (Charité)：現在はベルリン・フンボルト大学に属す。広大な敷地の中にさまざまな医学研究・医療関連施設を持ち、300年の歴史を誇るドイツ最大の医学コンプレックス。



ヨハネス・ミュラーの肖像写真

ルドルフ・フィルヒョウ

ルドルフ・フィルヒョウ (Rudolf Virchow, 1821-1902)、ドイツの生理学者、病理学者、政治家。

フィルヒョウは、19世紀後半のドイツにおける医学関連の学問の発展期に活躍した科学者であった。彼の専門領域は解剖学、生理学、病理学、公衆衛生学、社会医学、人類学などであり、細胞病理学の基礎を作った人であった。政治的には自由主義者であり、プロイセン政府に異を唱えた。

フィルヒョウは、ヘルムホルツと同様にベルリンの陸軍軍医学校に学び、ベルリンの医学コンプレックスであるシャリテーで研究を行い、ベルリン大学講師を経て、ヴュルツブルク大学病理学教授となり、次でベルリン大学病理学教授となった。1862年には政治家を志し、時の宰相ビスマルクの軍国主義的政治に強く反対した。1863年にはドイツ人類学会を設立し、またすべての病気は細胞の形態的、機能的、栄養的变化によるものであると考え「すべての細胞は細胞から」と云う細胞病理学説を唱えた。フィルヒョウは、このように学問の領域においても、また一般社会または政治の世界においても言動が積極的な自由主義者であった。ビスマルクは、フィルヒョウのあまりに激しい政治的攻撃に怒り、フィルヒョウに対して決闘を申し込んだほどであった。

ベルリンのシャリテーにある病理学研究所は、戦後フィルヒョウが集めた資料を展示していたが、1997年頃から「医学歴史博物館」と改名して展示している。種々の興味ある資料の展示があるが、素人には気持ちの悪くなるような資料の展示もある。フィルヒョウの病理学の講義室が爆撃で破壊されたまま完全には修復されず、講義室として保存されている。これは連合軍が病院を爆撃したことに対する無言の抗議である。

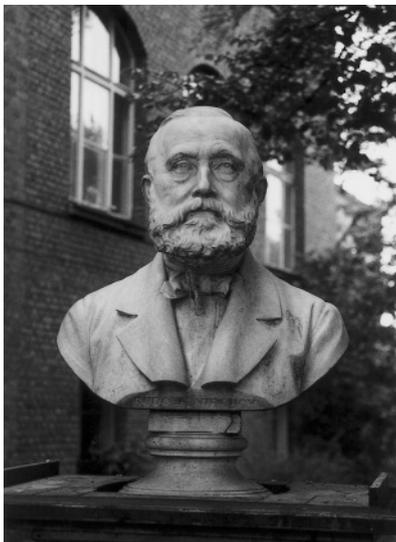
シャリテーの南門の小広場に、フィルヒョウの大きな記念碑(戦う男の像)がある。フィルヒョウの墓はベルリンのアルター聖マティウス教会墓地(Alter St. Matthaus Kirchhof)にあり、墓石は暗色の大きな石板であり、鉄の柵で囲まれている。

ドイツにおける19世紀の病理学の創始者ヨハネス・ミュラー(Johannes Muller, 1801-1858、生理学者)についても一言したいと思う。ミュラーは、ライン河畔の都市コブレンツに生まれた。聖職者になろうとしたが、生理学を専攻し、広範な領域について学び、研究を行った。特に「視」神経の研究を行い大きな成果を得た。フィルヒョウはミュラーの弟子の一人であった。

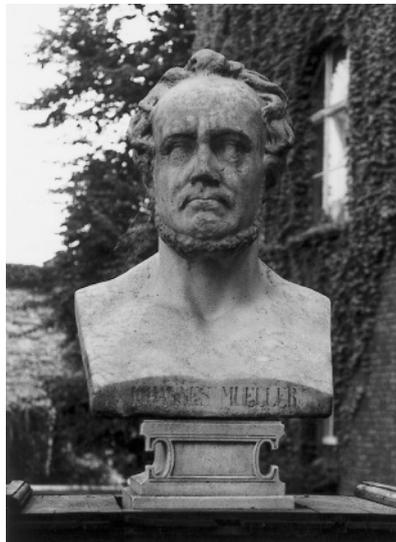
ミュラーは、フィルヒョウと同じシャリテーで研究を行いベルリン大学の教授であった。東ドイツが西ドイツに統一されるまでシャリテーの病理学教室の前にはミュラーとフィルヒョウの大理石の胸像が向き合って設置されていたが、今は風化を避けて両者とも屋内に保存されている。

ミュラーは、実験的客観的な生理学教科書を著作し、新しい生理学の成立に貢献した。教育者としても優れた人物であり、ミュラーの学生にはフィルヒョウのほか、T. シュヴァン(Theodor Schwann, 1810-1882)、デュ・ボア・レイモン(Emil Du Bois-Reymond, 1818-1896)、H. ヘルムホルツ(Hermann Helmholtz, 1821-1894)ら高名な生理学の建設者がいた。

※本稿に掲載の写真は、著者の撮影によるものである。



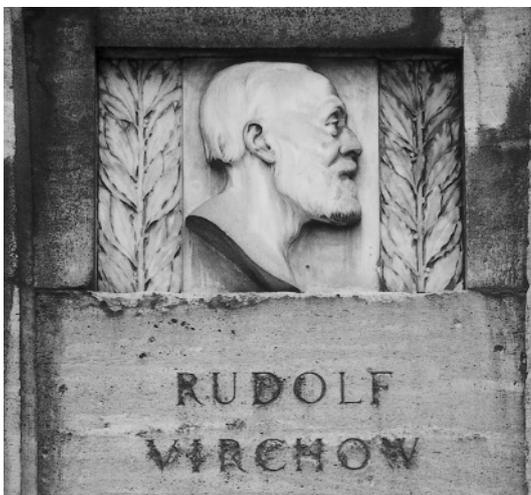
1990年頃まで病理学教室前に立っていたフィルヒョウの大理石像。現在は医学歴史博物館の室内に保存されている。



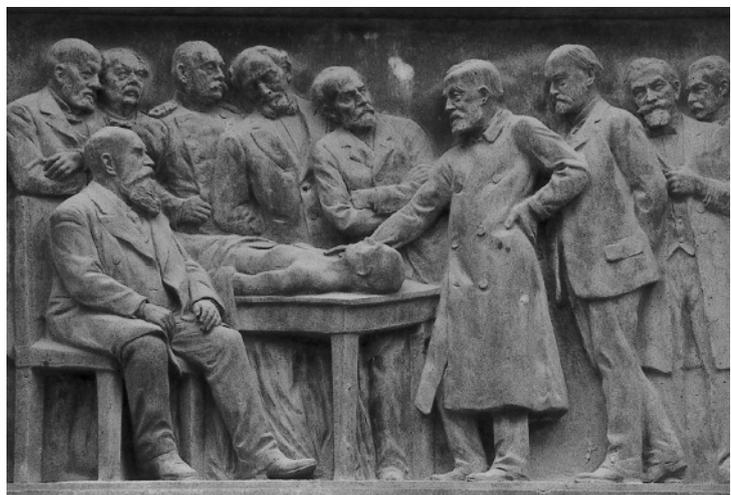
病理学教室前にフィルヒョウの胸像と向かい合っ
て立っていたミュラーの大理石像



ベルリン、アルター聖マティウス教会墓地のフィル
ヒョウの墓



フィルヒョウのレリーフ(シャリテー南門のはずれのルーゼン通り
にある戦う男の像の台座に刻まれている)



シャリテーに展示されている解剖を担当しているフィルヒョウの銅版画

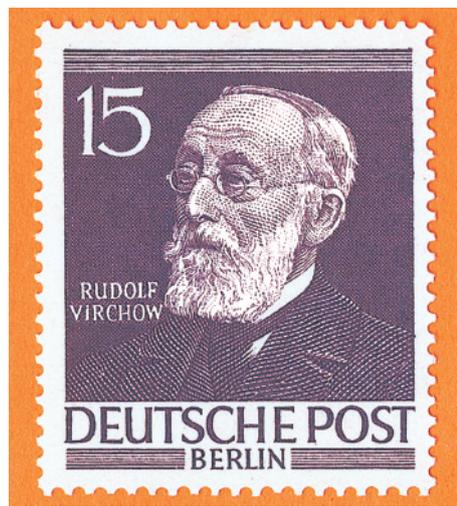
ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(27) ルドルフ・フィルヒョウ



ベルリン、シャリテ設立250年記念切手。1960年、DDR発行



シャリテ南門のはずれのリーゼン通りにある戦う男の像は病気と医学を象徴している



フィルヒョウのベルリン有名人切手の中の一つ。1952年/53年、ベルリン発行



フィルヒョウ生誕150年記念切手。1971年、DDR発行



ベルリン、自然博物館の2階部分に立っているミュラーの立像

表紙写真

ヒメサユリ (姫早百合・ユリ科ユリ属)

ヒメサユリは、背丈が50cm前後。6月から7月にかけて、ピンクの美しい花を咲かせる群生は見事で、その可愛らしさから大変人気があります。自生地は新潟、山形、福島、宮城県のごく限られた山地のみで、昭和30年代までは大きな群生が見られたものの、今では絶滅危惧種にも指定され、各自治体でもさまざまな繁殖・保護活動が行なわれています。表紙写真は新潟・福島県境の浅草岳(あさくさだけ・1586m)頂上付近での撮影ですが、各地の花の時期には多くの愛好者が訪れています。(写真と文 北原音作)

編集後記

シルバーウィーク、今年は思わぬかたちで5連休となりましたが、読者の皆様はいかが過ごされましたか。春のゴールデンウィークに対して、敬老の日を含む連休であったためシルバーウィークとしたとの話もあるようです。

さて、次のシルバーウィークの連休は、何時になるのでしょうか。秋分の日が、国立天文台での天文計算によって決められる休日ですので、あくまでも予測ですが5連休とすると、次は2015年、その次は2026年まで待たなければならないようです。これではシルバーウィークと呼ぶより、プラチナウィークとしたほうが良いのかもしれない。

本誌は、1950年3月の第1号発行以来、来年で

創刊六十周年を迎えます。論語では六十は、「耳順」(理にかなうことなら、聞いてすぐ理解できること)とされています。ケミカルタイムズも六十周年に向けて、より分かり易い内容でお届けできるよう一層努めてまいります。

本号では、DNA、タンパク質に次ぐ第3の生体成分として、関心を集めています糖鎖に関するいくつかの論文を掲載させていただきました。今後とも、本誌をご愛顧戴きますようお願いいたします。

なお、掲載を予定していました「新しい銀イオンクロマトグラフィー用HPLCカラム“Silver column KANTO”の開発(2)」は、次号に掲載させていただきます。



関東化学株式会社

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3丁目2番8号
電話 (03) 3279-1751 FAX (03) 3279-5560
インターネットホームページ <http://www.kanto.co.jp>
編集責任者 築島 功 平成21年10月1日 発行